原著 専門学校教育(鍼灸科)の社会化機能の実態について

—学生意識調査から—

河井 正隆* 中村 辰三

要旨 鍼灸師という職業人にまで学生の意識を高揚させていくことが求められる専門学校教育の中で(以下、社会化機能という)、その実態を知るために学生に対する意識調査を実施し、検討を行った。

方法としては平成5年7月、本校鍼灸科3年生172名を対象に、無記名方式で意識調査を実施した。

入学前、在学中、卒業時の3段階による社会化の実態に視点をあて「順調タイプ」「葛藤タイプ」「無目的タイプ」の3タイプに分類し検討した。その結果約8割が「順調タイプ」の学生であり、「無目的タイプ」の学生はいなかった。これは専門学校の1つの特性と思われる。しかし、「葛藤タイプ」の学生が1割存在しており、このタイプの学生への内面的な調査研究、教育的配慮が今後の課題と考えられる。

I はじめに

現在の専修学校は、大学や短大に次ぐ第三の高等教育機関としてここ十数年で大きな社会的地位を占めるようになったといわれる¹⁾。専修学校の目的は学校教育法第82条の2に「職業若しくは實際生活に必要な能力を育成し、又は教養の向上を図ることを目的……。」と表現され、それぞれの学校はこの目的に独自の教育理念を付加し、教育活動を行うことになる(以下、専門学校という)。

また、職業教育を行う専門学校では、一定のカリキュラムに沿って限られた年限で、実社会で通用する職業的態度・技術・能力を養う教育目標が要求される。そして学生は、顕在的(フォーマル)または潜在的(インフォーマル)カリキュラムにより自らが職業人としてのそれらを学習していくこ

とになる。学習段階では、学習の目的がはっきりしている(つまり、卒業後はその職業に従事するであろう)専門学校生には、学校の社会化機能はかなりの期待が考えられる。

そこで本稿では、鍼灸師という職業人にまで学生の意識を高揚させていくことが求められる専門学校教育として、その実態を明らかにするため鍼灸科の学生を対象に学生意識調査を行った。視点としては市川²⁾、有本³⁾らにならい、入学前、在学中、卒業時(本研究では3年次7月末に意識調査を実施)という3つの段階から社会化の実態を意識調査の結果から検討し考察を行った。

II 調査方法とその時期

平成5年7月末に本校の鍼灸科3年生172名を対象に実施した。意識調査は無記名の質問紙法で行った。なお7月末は、本校での3学期制の前期が終り、3年間の修業年限での大多数の履修科目が終了した時期である。なお、夏休み以後は中期・後期として国家試験の受験対策授業が主流となる。

* Masataka KAWAI 明治東洋医学院専門学校

共同研究者：Tatsuzou NAKAMURA 明治東洋医学院専門学校

Key Words：専門学校教育、社会化、鍼灸師

Ⅲ 結 果

1) 対象者の属性

- ① 性別は「男性」142名(82.6%),「女性」30名(17.4%)。
- ② 平均年齢は26.5才。
- ③ 入学前の受教育歴は「普通科高校」が89.3%,「その他」が10.7%(商業科や工業科など)であった。そのうち高等教育機関を経験している学生は、「短大卒」が9名(5.2%),「大学卒」が44名(25.5%)であった。さらに、「専修学校や各種学校を卒業」した学生は33名(19.2%)であった。これから、49.9%の学生は本校進学以前にすでになんらかの高等教育機関に属していたことになる。
- ④ 入学以前の職歴では、職歴を「有するもの」84名(48.8%),「有しないもの」88名(51.2%)のほぼ同数であった。職業としては公務員,教員,研究職,プロパー,看護婦,理学療法士,会社員,スポーツトレーナー,建築業など多種多彩であった。

2) 本校受験を決定した時期とその動機について

- ① 高校時代では多い順に、「高校3年」の時が41名(23.8%),以下「高校1年」または「それ以前」が14名(8.1%),「高校2年」が10名(5.8%)であった。また本校受験の動機は、高校生という立場にもかかわらず意外にも「高校の進路指導によるもの」が1名(1.5%)であった。受験動機の上位4つをあげると「親や知人が鍼灸という職業に従事していたから」という学生29名(16.9%),「自分が鍼灸治療を受けていたから」20名(11.6%),「親や知人が鍼灸治療を受けていたから」8名(4.6%),「書物やマスコミを通じて」5名(2.9%)であった。
- ② 1)の④の結果から、社会人の受験者が多く、在職中に本校受験を決定した学生が全体172名中53名(30.8%)であった。また、その動機として多い順に「自分が鍼灸治療を受けていたから」16名(30.2%),「親や知人が鍼灸という職業に従事していたから」13名(24.5%),「書物やマスコミを通じて」9名(17.0%),「親や知人が鍼灸治

療を受けていたから」5名(9.4%)であった。年齢的な問題もあるかもしれないが、このことは社会人の受験生ほど身をもって鍼灸治療の効果を体験していることが、現役受験生との大きな違いかもしれない(図1)。

図1 本校受験の動機(上位4つ)

3) 本校入学後の進路の動揺について(表1)

- ① 入学後に進路変更を考えた学生は、172名中20名(11.6%)であった。
- ② 時期については1年次に着目すると、多い順に「1年次の5月から夏休み終了まで」6名(30.0%),「それ以後1年次終了まで」4名(20.0%),「入学直後」2名(10.0%)であった。また「2年次になってから」が8名(40.0%)という結果であった。
- ③ その理由として上位3つをあげると、「希望していた進路と違っていたから」5名(25.0%),「授業内容について行けなくなったから」4名(20.0%),「学校の雰囲気になじめなかったから」3名(15.0%)であった。
- ④ また、一度進路変更を考えたにもかかわらず在学し続けた理由として上位3つをあげると、「とにかく卒業までの辛抱だと思ったから」8名(40.0%),「鍼灸に興味を覚えるようになったから」6名(30.0%),「進路変更してもどうせたいした違いがないと思ったから」3名(15.0%)であった。③とも関連してこのことは少なからず、不本意就学者が鍼灸師という職業人に自らを方向づけることができずに卒業を向かえるということが推測される。また、不本意に本校に入学

表1 入学後の進路動揺について

入学後に進路変更を考えた時期(n=20)	
1位：2年次になってから	(40.0%)
2位：1年次の5月から夏休み終了まで	(30.0%)
3位：それ以後、1年次終了まで	(20.0%)
4位：入学直後	(10.0%)
↓	
その理由(上位3つ)	
1位：希望した進路と違っていたから	(25.0%)
2位：授業内容について行けなくなったから	(20.0%)
3位：学校の雰囲気になじめなかったから	(15.0%)
↓	
在学し続けた理由(上位3つ)	
1位：とにかく卒業までの辛抱と思ったから	(40.0%)
2位：鍼灸に興味を覚えるようになったから	(30.0%)
3位：進路変更をしてもどうせたいした違いがないと思ったから	(15.0%)

して在学中に進路変更を考えたとしても、自己実現の場をもつ可能性のないことから、消極的な学生生活を余儀なくされている学生が極少数ではあるが在学していることがわかる。

4) 進路を方向づけた要因について

① 入学前の決意の有無から

ア. 鍼灸師になる決意をもって入学した学生が172名中141名(82.0%)であった。このなかで在学中にさらに鍼灸師という職業への方向づけを強化したと思われる要因(動機づけ)を履修科目などを中心に調査した。その結果をとくに「専門基礎系科目」「専門系科目」「臨床実習」「友人関係」「教員の学生への態度」の5つの視点からみてみた。「大いに動機づけとなった」ものは高位の順に、「専門系科目」54名(38.3%)、「臨床実習」50名(35.5%)、「友人関係」41名(29.1%)、「専門基礎系科目」31名(22.0%)、「教員の学生への態度」19名(13.5%)であった。

イ. 入学の段階で鍼灸師なる決意がなかった学生は、172名中17名(9.9%)であった。これをアと同様な視点から進路の方向づけの要因(動機づけ)をみると、ほとんどが動機づけが高まったという結果は得られなかった。逆に「動機づけにならなかった」ものを列挙すると「臨床実習」

「専門基礎系科目」「友人関係」がそれぞれ6名(35.3%)、「教員の学生への態度」4名(23.5%)、「専門系科目」2名(11.8%)であった。

このことは不本意就学者には、自らを鍼灸師という職業へ社会化する意欲に欠け、同時に現在行われている本校のカリキュラム(潜在的カリキュラムも含む)では、これら不本意就学者に社会化を及ぼすことには限界があるのかもしれない。

② 在学中の進路動揺(進路変更を考えた)の有無から

ア. 在学中、進路変更を考えず鍼灸師になるという方向づけをもっていた学生138名(80.2%)について、さらに進路の方向づけが強化された要因(動機づけ)をみると、前述と同様の視点から高位の順に「専門系科目」59名(42.8%)、「臨床実習」48名(34.8%)、「友人関係」43名(31.2%)、「専門基礎系科目」36名(26.1%)、「教員の学生への態度」21名(15.2%)であった。

イ. 逆に在学中、進路変更を考えた学生20名(11.6%)についてみると、①のイ.と同様に前述の5つの視点に対して「動機づけとなった」と答えた学生はほとんどなく、わずかながら「臨床実習」と「友人関係」がそれぞれ3名(15.0%)、「専門系科目」と「教員への態度」がそれぞれ1

名(5.0%)で、「専門基礎系科目」についてはいなかった。逆に「動機づけにならなかった」と答えた学生が多くを占め、高位の順に「臨床実習」3名(15.0%)、「友人関係」3名(15.0%)、「専門系科目」1名(5.0%)、「教員の学生への態度」1名(5.0%)、「専門基礎系科目」はいなかった。

ここでも①のイ.と同様に、進路動揺を持つ学生に対する社会化の難しさが伺われる。また、鍼灸師になる決意がある(入学前,在学中ともに)学生にとっては5つの視点については入学前,在学中いずれも顕著な差はみられない(図2)。

図2 進路を方向づけた要因(上位5つ)

しかし、決意がなかった学生と進路変更を考えた学生との間には顕著な差がみられた。このことは、入学前の決意の有無が在学中の進路方向をある程度決定するということであり、不本意

図3 進路を方向づけなかった要因(上位5つ)

就学者を作らないためにも入学前のガイダンスの充実が望まれる(図3)。

5) 卒業後の進路希望について(表1,2)

① 入学前の決意の有無から

ア. 入学の段階で鍼灸師という職業への方向づけがあった学生141名(82.0%)では、卒業後の進路として多くの学生が選択した上位3つをあげると「何年間かの勤務後、開業」49名(34.8%)、「鍼灸院や接骨院に勤務」19名(13.5%)、「他の教育機関に進学して資格を取得」17名(12.1%)であった。なお、他の資格を取得したいとする学生は大多数が「柔道整復師」の資格であった。

イ. 入学の段階で職業選択の方向づけのないまま入学した学生17名(12.6%)では、次のような進路を選択した。上位3つをあげると「何年間かの勤務後、開業」7名(5.0%)、「他の教育機

表2 卒業後の進路希望(上位3つ)

	入学前に決意があった学生	入学前に決意がなかった学生
1位	何年間かの勤務後、開業(34.8%)	何年間かの勤務後、開業(5.0%)
2位	鍼灸院や接骨院に勤務(13.5%)	その他の教育機関に進学して資格取得(1.4%)
3位	その他の教育機関に進学して資格取得(12.1%)	まだ迷っている(1.4%)
	在学中に進路変更を考えなかった学生	在学中に進路変更を考えた学生
1位	何年間かの勤務後、開業(36.2%)	病院・医院に勤務(25.0%)
2位	鍼灸院や接骨院に勤務(10.9%)	鍼灸院や接骨院に勤務(20.0%)
	その他の教育機関に進学して資格取得(10.9%)	何年間かの勤務後、開業(20.0%)
3位	すぐに開業(10.1%)	—

関に進学して資格を取得」と「まだ迷っている」がそれぞれ2名(1.4%)であった。

② 在学中の進路動揺(進路変更を考えた)の有無から

ア. 在学中に進路変更を考えなかった学生138名(80.2%)では、卒業後の進路として選択した項目の上位3つをあげると「何年間かの勤務後、開業」50名(36.2%)、「鍼灸院や接骨院に勤務」と「他の教育機関に進学して資格を取得」が15名(10.9%)であった。また、「すぐに開業」が14名(10.1%)と約1割の学生が在学中から開業を準備していることがわかる。

イ. 在学中に進路変更を考えた20名(11.6%)では、卒業後の進路として選択した項目の上位3つをあげると「病院・医院に勤務」5名(25.0%)、「鍼灸院や接骨院に勤務」や「何年間かの勤務後、開業」がそれぞれ4名(20.0%)であった。また、ア.と比べて「すぐに開業」と答えた学生はいなかった。

IV 考 察

本稿では入学前、在学中、卒業時のそれぞれの段階を、3年次(7月)の時点に限って、そこから過去の意識の回想や卒後の希望進路を論じたが、卒業後の実際の進路などについて論ずることは不可能であり、社会化機能の実態にせまるにはいささか厳密さに欠けることは免れない。しかし、3年次(7月)を中心にするとはいえ、過去の回想は経時的な社会化の側面を考慮していることには違いなく、卒後の進路の推測においても卒業の半年前ということ、またこれ以後の本校のカリキュラムは国家試験対策授業が主になることから、この時期に行った意識調査から社会化機能の実態を考察することは可能であると思われる。

そこで前述の3つの段階から次の3タイプについて考えてみたい。1つは、入学以前から進路動向が決定しており在学中も着実に社会化され、卒業後も鍼灸師という職業につくという一貫性をもった「順調タイプ」。また2つは、入学時や在学中に進路の動揺がみられるが最終的には鍼灸師を希望するという「葛藤タイプ」。最後にこれに対して、入学前に進路の方向づけがなく在学中も我慢

しながら、最終的には鍼灸師にはならないという「無目的タイプ」である。

すでに述べたように、本調査結果をこれらの3タイプにあてはめると、本校に入学する学生の82.0%は入学の段階で進路の方向づけが決定している学生であり、約8割は「順調タイプ」といえ、これらの学生は自身や学校においても望ましい状況にあるといえる。逆に「無目的タイプ」はいなく、これも専門学校の特色であるかもしれない。問題なのは「葛藤タイプ」であり11.6%が相当する。この場合、これらの学生に対して、内発的また外発的に、どのような要因が最終的に鍼灸師という職業に学生自身を向かわしめたのだろうか。1つの結論として進路を方向づけた要因(動機づけ)は結果から、「臨床実習」と「友人関係」であったとみることができる。これは、臨床という実際に患者との接触のなかで、鍼灸師という職業の楽しさや社会的な使命感などを実感し、また、同じ志をもった友人が進路に動揺を来たしている学生に、さまざまな面で激励や援助を行うことは想像に難くない。これらが進路の動揺にもかかわらず最終的に鍼灸師に進む要因になったと思われる。これに対し「順調タイプ」では「専門系科目」が要因のトップであり、これらの学生には知的好奇心の刺激が、ますます鍼灸師という方向づけをより強固に向かわしめたものと思われる。

学校の社会化機能は、顕在的(フォーマル)、潜在的(インフォーマル)なカリキュラムによる学習が継続して初めて可能である。本調査での顕在的な分野は「専門基礎系科目」「専門系科目」「臨床実習」であり、潜在的な分野は「友人関係」「教員の学生への態度」が相当する。とくに専門学校教育では、その職業に従事するための資格を取得するという、いわば受験予備校的性格と、同じにその職業にふさわしい人格形成も期待されることになる。しかし国家試験の合格率や、現在の鍼灸専門学校は私立であるため学生募集の獲得という経営的側面から、専門学校の教育では前者に重点が置かれているのが現状ではないだろうか。そのため顕在的なカリキュラムの充実や、その機能を保持するため学生に対して強制的な態度を示すといったことがなされ、潜在的なカリキュラムは軽

視される傾向にあるのではないだろうか。

専門学校という場では「葛藤タイプ」を見るのは極小数であろうが、この小数を無視することはできない。現職教員の切実なる問題としては、このタイプの学生をいかに社会化していくのか、その方法やカリキュラムはどうあるべきなのかといった事柄であろう。そのためにも有本³⁾が言うように、これら学生にはどのような葛藤経験があり、また進路変容を可能にする条件とは何かといった「葛藤タイプ」の内面的な調査研究が今後の課題となろう。

参考文献

- 1) 梶原 宣俊：専門学校教育論，学文社，7～14. (1993)
- 2) 市川 哲：大学生の職業意識の考察，明治鍼灸医学 4; 73～84. (1988)
- 3) 有本 章：教職における予期的社会化，大阪教育大学教育論集 5; 83～93. (1987)
(〒564 吹田市西御旅町7-53
明治東洋医学院専門学校)

The Actual Condition of Socializing Function of The Education of The Professional School (the faculty of acupuncture)

—From the student questionnaire—

Masataka Kawai and Tatsuzou Nakamura
Meiji school of Oriental Medicine

Outline

We made inquiries into the actual condition of the education of the professional school, which is required to exalt the mind of the students to the spirit of acupuncturists, the professionals, (below we call it socializing function.) conducting the questionnaire on our students.

In July 1993, we conducted the unsigned questionnaire on 172 students of the 3rd grade of the faculty of acupuncture.

We classified the students into 3 types, “making good progress type”, “having trouble type” and “having no purpose type”, considering from the point of view of socializing function in 3 stages, before entering the school, studying in the school and graduating from the school. Consequently, about 80 percent of the students were “making good progress type” and there weren’t any “having no purpose type” students. It seems to be one of the typical characteristics of professional schools. However about 10 percent are “having trouble type” students and we consider that the more internal inquiries on this type of the students and the educational consideration toward them are our questions to answer in the future.